

親愛なるマリア・エレナ、

2010年1月 マドリードにて

手紙を差し上げるにあたり貴女とどのようにお話しをしたらよいのか明確でないことに気づきました。礼儀作法では貴女のような方には敬意を持って接するよう言われていますが、私たちアーティストがどれだけ形式的なことに手こずっているかを思うと下手に形式にこだわると却って冷たく、親密さに欠けるのではないかと懸念していました。

そんな時、1999年のアルゼンチン音楽著作権協会授与式に於いて、貴女と会長のアリエル・ラミレス氏から賞を手渡していただいた時のことが頭に浮かび、当時の写真を探し出しました。出てきた写真たち、その“静物画”としての私たちは、あの時の出会いがどんなに心温まるものであったかを思い出させました。

そのような訳で、くだけてお話をさせていただいてもいいのではないかと思います次第です。もしお気に障るようでしたらお許し下さい。そして身の程をわきまえるよう遠慮なくお知らせください。

さてそれからどのようにしたらこの手紙を貴女にお送りできるのか調べました。そしてアルゼンチンの知り合いたちに助けを求めたところ、貴女が入院されていることを知りました。それがどの程度正しい情報なのかわかりません。もし間違っていたら申し訳ないのですが幼い私が“レイナ・バタタ”の体調が優れないのではないかと悲しみに打ちひしがれています。入院は一時的なもので、すぐご自宅に戻られることを祈っております。

あの1999年の授賞式から数日後、アニメ映画プロデューサーのガルシア・フェレから電話をもらい、貴女の歌、「マヌエリータ」のレコーディングに興味があるかどうか尋ねられました。映画「カメのマヌエリータ」（日本未公開）はその頃既に完成間近でした。私はレコーディングスタジオに赴き、指示されたように歌いました。しかし結局、私の声ではなく女性の声が使われました。子供の心にはそちらのほうが断然ふさわしい、という理由で。

授与式で貴女がご自身の歌の本を私に下さった時、たしかに私も驚いたのですがほとんどの子供向けの歌は女性が歌っているのだ、とおっしゃった言葉が思い起こされました。そしてこのガルシア・フェレの一件があってからというもの、私はこれらの子供の歌を“お父さんの声で”歌う、という貴女の夢を実現させたい気持ちに取り憑かれてしまいました。

そしてついに数週間前、貴女の32曲の“小さな宝石たち”のレコーディングをやっと終えたのでそのことをお伝えしたくて手紙を書くことにしたのです。貴女の歌は世代から世代へ耳だけで歌い継がれてきたので、今回楽譜を初めて読んでみたわけですが、「マヌエリータ」はバラードではなくハバネラなのですね。そのような官能的なリズムで演奏すると更に美しい曲になりますね！ それからLa Cancion del Estornudo（くしゃみの歌）、La Familia Polillal（蛾の家族）、El Show del Perro Salchicha（ダックスフントのショー）は劇場音楽の原型であること、などなど貴女の曲すべてについて多くの発見がありました。

私はピアニストのジュリオに、私たち自身が楽しまなければ子供たちが聞くわけがないし自分たちが泣かなければ子供たちだって泣くわけがないと話し（そうです、La Pájara Pinta（パハラ・ピンタ）を歌う時、声の震えを押さえるのがどれだけつらかったことか！）、そんな風に私たちは笑ったり泣いたりしながらレコーディングを続け、美しい作品集が出来上がりました。

私は温かみのある深い声のほうが聴いている子供たちの心に響くのではないかと、敢えて低いトーンで歌うようにしました。また、使う楽器を極力控え、原曲のようにピアノだけの演奏にしています。貴女はどれだけ言葉のピュアさやメロディの優しさに、余計なことに惑わされることなくフォーカスしたことか！ 信じら

れないほど素晴らしい!

そして今、この美しく録音された素材を今の電子化漬けになっている子供たちに、何年も前に私や同じ世代のすべての人々に届いたのと同じ強さで届けることができる商品にする（このようなひどい表現を使ってごめんなさい）、繊細な作業をしているところです。ところで当時は私たちの子守をしていただきありがとうございました。

この作品集をいつ発表するかまだ決めていません。このプロジェクトを成熟させるのにもじっくり時間を掛けましたし、急いでいるわけではありません。ただ、私の感謝と愛をこめた作品集があることを貴女のお記憶に留めておいて頂きたいのです。

心からの称賛を込めて、
ホセ・クーラ

P.S. この作品集の編集とミキシングを2011年に終えた。マリア・エレナはその年の1月にこの世を去った。彼女にこの手紙を受け取ってもらうことも、またレコーディングを聴いてもらうことも叶わなかった。私が深く愛するこの歌たちをゼロ歳から百歳までの多くの子供たちに楽しんでもらえたなら哀しみは癒されることと思う。